



## 地域の新たな産業をめざしてー地域循環型ウニ養殖ー

(独) 水産総合研究センター増養殖研究所養殖システム部 町 口 裕 二

北海道東部太平洋沿岸に位置する浜中町には、浜中漁協と散布漁協の二つの漁協があり、サケ定置やサンマ棒受などの漁船漁業の他にコンブ漁も盛んで、天然コンブ水揚げ日本一を誇っています(写真1)。また、かつてはエゾバフンウニを漁獲する潜水漁業も盛んでしたが、天然資源の減少が著しく、現在は休漁や人工種苗放流など資源回復に努めています。

### 放流だけでなく養殖できるのでは

浜中町散布漁協の指導漁業士でもある村田準逸さんは、四代続く漁師でコンブ漁を中心に漁業を営んでいます。しかし、ここではエゾバフンウニ養殖の先駆者としての顔を紹介します。



写真1 天然コンブ生産量日本一の看板

散布漁協がウニ養殖に取り組みはじめたのは、平成4年からです。主力のコンブ漁は天候に左右される不安定な漁業であり、かつては冬場に漁業者が出稼ぎに出ることが普通でした。コンブ漁に加えて何

か地元で出来る安定した漁業が出来ないものか、との思いがウニ養殖を始めたきっかけでした。何か他にも、地元で出来る安定した漁業をとの思いから、漁協の仲間とともにウニ養殖部会を立ち上げ、試験養殖を取り組みはじめました。

村田さんは、かつてウニの人工種苗放流用の稚ウニ中間育成に携わった経験から、エゾバフンウニは養殖できるのではと考えたそうです。ウニ養殖を思い立ったものの、これまで全国でもウニの養殖に取り組んだ事例は無く、手探りの状態で始めました。その際、大きな力となったのが、地域の水産業を支える水産技術普及指導所でした。熱心な普及員と村田さんをはじめウニ養殖部会の人たちが連携して、養殖漁場の環境調査や育成施設の検討を進めていったそうです。

### 待ち受ける苦難の数々

ご多分に漏れず、ウニ養殖が軌道に乗るまでには幾多の苦難が待ち受けていまし



写真2 北海道区水産研究所で、身入りと品質の評価を行うウニ養殖部会のメンバー

た。平成6年10月の北海道東方沖地震では、はじめての出荷を目前に津波によって養殖ウニの大半を失い、施設にも被害が出ました。また、ゲリラ豪雨によって養殖場内の海水の塩分が低下し、大量斃死も頻繁で、製品となったウニの身入りや色もばらつくなど、品質が安定しませんでした。そのような状況下、施設係留方法や飼育水深の調整など工夫を重ね、さらに与えるエサもウニに対して最も効果がある海藻を特定するなど、ウニ養殖技術実用化へ着実に前進していったのでした。多くの困難に遭遇しても、村田さんはウニ養殖は絶対に成功するという信念を持ち、道や国の指導また試験研究機関の支援をうけつつ、地道な努力を重ねていきました。地元の水産研究所を訪れ、ウニの身入りや品質の評価を研究者と一緒にすることもあり、時には動きの鈍い研究者の尻も叩きました（写真2）。

### ウニの餌も地産地消

ウニの養殖漁場は、火散布沼という海跡湖で、潮の干満にあわせて海水が出入りする潮通しの良い場所です（写真3）。給餌方法やエサの種類を工夫し、身入りの均一な高品質のウニが9月から翌年3月までの間、安定して出荷することが可能となりま



写真3 養殖場は沼と海が繋がっている水路の部分に設けられています。ブイの下に円筒形の養殖カゴが吊されています。

した（表紙写真参照）。このため、養殖されたウニの評価は極めて高く、常に天然ウニの上をいく価格で取引されているようです。また、一般的な魚類養殖では、エサのほとんどは国外のものを使用しているため、残餌や糞は直接環境への負荷となります。しかし、散布でのウニ養殖は、地元のウニが地元の海藻を食べて育つため、地域循環型であるのが特徴です。

### 地域の重要な産業へと成長

さて苦節20年、散布漁協でのウニ養殖の取り組みは近隣の漁協にも広まりました。村田さんたちウニ養殖部会では、自らが苦勞して確立した養殖技術を惜しむことなく提供しています。最近では浜中町内の2漁協を合わせた養殖ウニ生産は数量で約50トンを超え、地域の重要な産業へと成長しました（浜中町広報誌H22年2号より）。ウニ養殖をはじめのきっかけでもあった冬場の出稼ぎは必要がなくなり、ウニ養殖に取り組んでいるほとんどの家では後継者が育っているそうです。村田さんにも立派な後継者ができ、昨春に大学を卒業した息子さんが五代目になりました。今後、地域の水産振興に一層のご尽力とご発展をご祈念いたしたいと思います（写真4）。



写真4 村田さん(右)と息子で後継者の貴志さん(左)